



木造薬師如来坐像



木造大日如来坐像

十、木造薬師如来坐像

江戸時代
薬王寺 大字台宿字大久保

像高 八三・〇cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔

粒状の螺髪を彫出し、肉髻珠、白毫相を

あらわす。これらは水晶をはめ込んでいる。

左肩を覆い右肩に少しかかる衲衣をつけ、

左手は膝上におき五指をのばし、右手は胸

前にあげ同じく五指を軽くのばす。左手に

は薬師如来であることを示す薬壺をのせて

いたが、現在それは失われている。

頭部は両耳前を通る線で前後に二材を矧ぎ、三道下で体軀に挿し込む。体幹部は、前後に二材を寄せる。脚部は横に一材を矧ぐ。その他、細部に小材を矧いでいるが、像の中心部は一般的な木の寄せ方をしている。

この像は、もと当寺の客殿の本尊であったが、現在では薬師堂の本尊となっている。この町の仏像では、比較的大きな像である。しかし作風は、江戸時代の定型化したものである。頭部が前傾し、横からみると顔貌は両頬の肉付がそがれたようになり、平板

な印象を受ける。平板な印象は体軀の造形にも通じ、像の大きさの割には迫力に欠ける。

十一、木造大日如来坐像

江戸時代
宝泉寺 大字上石井字仲花

像高 四六・二cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔

銅製透彫の宝冠を戴き、左肩より条帛を

かけ、裳をつけ右足を外にして結跏趺坐す

る。菩薩のお姿である。現在、両手首より